説教20200426　イザヤ43：10-12　ルカ24:13-35 154　158　21-57

「パンを裂いてくださるイエス」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　先週、絡みついてくる罪から離れ去るということに関連して、詩編１３１篇を（旧約９７３ページ）を読みました。「わたしの魂を、幼子のように／母の胸にいる幼子のようにします」というこの詩編１３１篇ですが、新しい聖書協会共同訳聖書では、この幼子というのを乳離れした幼な子、と訳しています。チチばなれした乳幼児という意味です。このように書かれています。「私は魂をなだめ、静めました／母親の傍らにいる乳離れした幼な子のように。／私の魂は母の傍らの乳離れした幼な子のようです。」

　この乳ばなれしたというのが大事です。新生児期の、子と母親とが一体になっている状態を終え、おぼろげにも自分と母親とが別の人格であるということが分かってくる時期の乳幼児のことをここでは言っているのです。その時、幼な子は母親を離れ、自らの足で一歩を踏み出すしますが、そこには未知の世界に一人踏み出す恐れと不安、それと同時に希望と喜びが混在していることでしょう。しかし、未だ１歳になるかならないかの幼な子にとって、母親が常に傍らにいてくれることは欠かせません。この詩編１３１篇で、ダビデ王は、自らの境遇を、このような乳離れした幼な子の境遇になぞらえて歌っているのです。国家の統治という仕事に従事しているダビデ王は、主なる神に信頼し安心を得ているといえども、その境遇はやはり乳離れした幼な子が感ずるような恐れと不安に付きまとわれるものであったのでしょう。

　話は変わりますが、主日に唱える「罪の告白と赦しの言葉」に「わたしたちは、思いと言葉と行いによって多くの罪を犯していることを懺悔します」という文言があります。この「思いと言葉と行いによって」という文言は、宗教改革期以来、あるいはそれ以前から、イギリスにおいてずっと唱えられ続けて来たものです。先週、罪というのは私たち全体を覆っている泥沼のようなもの、というお話をしましたが、罪を、思いによる罪、言葉による罪、行いによる罪、という様に分けることは出来ません。思いに罪が有れば、それは言葉にもまた行いにも現れ出るのです。

　今まで申し上げた２点、乳離れした幼な子のことと、思いと言葉と行いにわたる罪ということとは本日の聖書箇所を読む上で、大変助けになると思いますので是非覚えておいてください。

　では本日の新約の聖書箇所に入ります。冒頭の１３節に出て来る二人の弟子というのは、１０節に出て来る、主イエスが墓の中におられなかったという婦人たちの話を、たわごとのように聞いた弟子たちのうちの二人でありましょう。今日の主人公はこの二人の弟子たちですが、１７節によりますと、この弟子たちは暗い顔をしていたのです。どんな暗い顔かと言いますと、断食する偽善者のような暗い顔だというのです。そうして二人はエルサレムでの出来事について話し合い論じあっていたとありますが、その会話というのは否応なしに暗くなり、愚痴の一つでもこぼしてしまいそうな感じではなかったのでしょうか。なぜなら自分たちが望みをかけていたあのお方が十字架にかけられてしまったのですから。そうして、二人は夕方が近づいてくる空の下を、エルサレムから遠ざかりつつ、エマオ村へ向かって歩いていたのです。このように二人の様子を描写してみますと、そこには、思いと言葉と行いの罪に縛られている二人の姿を認めないわけにはいきません。私たちは、この有名な聖書箇所を二人の弟子が、道すがらに主イエスと出会えてよかった、といういわば牧歌的な喜びのくだりとして読みがちですが、単純にそのようなことではありません。

　今日の新約の聖書箇所は旧約の聖書箇所、イザヤ書４３章１０節、旧約１１３１ページ「わたしの証人はあなたたち、わたしが選んだ私の僕だ、と主は言われる」という御言葉が実現している箇所です。この二人の弟子たちはイエス・キリストの復活の証人なのです。どういうことかと申しますと、実は本日の新約の聖書箇所の冒頭１３節には、ギリシャ語の聖書にはもともと、「見よ！」という言葉が記されています。見よ！というのは、主なる神がわたしたちに対して投げかけている命令文です。つまり、主なる神である私はこれからイエス・キリストの復活の証人たちの証言を語るが、あなたたち、よく見ていなさい、と私たちに向かって促しておられるのです。そしてこの二人の弟子たちの行いも、初めから終わりまで主なる神のまなざしのもとになされていくのです。

　さて、１６節に二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった、とあります。そして３１節に、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。とあります。３１節に至るまでの間、二人は、この方が、イエス様であることが分からなかったのでした。それがなぜわかったかと言えば、二人の目がイエス様によって開かれたからです。この二人の弟子たちは、あたかも乳離れした幼な子の様であります。この二人は暗い顔をして、罪に縛られて歩いていました。しかし父なる神はこの二人をほおっては置かれなかったのです。二人が歩いている最中に、主イエスが同伴されるのです。しかし二人にはそれが会いたくてしょうがないイエス様であることが分からない。分からなくされている。この有様は、あたかも父なる神がその子供に対してイナイナイバーをしているかのようです。近くにいるのは分かっているのに顔は隠されている。そしてそこには、その覆いが取り去られた時の喜びを期待してよい、信仰の芽生えのようなものが感じられるのです。

　イエス様は、この暗い顔をした弟子たちにとことん寄り添われています。１７節からのイエス様と弟子たちとの会話、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存知なかったのですか」「どんなことですか」というやり取りを聞いていますと、言葉巧みなイエス様の誘導と、あきれて空いた口がふさがらない様子の弟子たちの口調とが好対照です。この弟子たちの目が開かれるまで、目の前のイエス様は、弟子たちにとっては、本当に分けの分からない不思議な人物と映っていたのではないでしょか。

　そして時を見計らってイエス様は二人に言われるのです。２５節「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」と。

　それからイエス様は聖書全体にわたって、御自分について書かれていることを説明されたのですが、二人の弟子たちはその説明に心を燃やしつつ聞き入っていたのでした。

　ここまでの成り行きで、私たちは主なる神の証人、証し人として歩まされていることの幸いを思わずにはいられません。私たちが罪にとらわれて、その眼を見えなくされているときでも、主なる神が私たちに対するまなざしを絶やされることは一瞬たりともないのです。そしてたまさかの道行く人になりすまして私たちのそばにいつの間にか寄り添っておられることもあるのです。私たちは主なる神への感謝と賛美をもって、主なる神への信頼をより確かなものとし、主なる神の声を聞き分けることが出来ますように、と祈ります。

　そうして３人は目指す村へと近づくうちに、二人の弟子が無理にイエス様を引き止めたので、イエス様は彼らと共に泊まるために家に入られたのでした。このくだりでも彼らの心が燃えている様子が推察できます。彼らはイエス様と一時でも長く一緒に居たかったのに違いありません。より正確に言えば、彼らはまだその時、それがイエス様であることが分かっていなかったので、その不思議な人物と共に居たかったのでした。彼らがその時耳にした聖書全体にわたる御言葉は、自ずから救いをもたらす不思議な御言葉として働いたのでありましょう。なぜなら神による救いというのは私たち人間の思いを、はるかに超えて、もたらされるものたからです。

　さて、共に家に入ったイエス様は、一緒に食事の席に着いた時、パンを取り、賛美の祈りを唱えられました。ここで私たちはルカ書２２章１４節からの主の晩餐の場面を思い起こすかもしれません。しかし主の晩餐の席には１２人の使徒たちだけがおりましたので、この二人の弟子たちには主の晩餐の場面を思い起こすことは出来ませでした。この二人には例えばルカ書９章１０節からの、五千人に食べ物を与えるイエスさまの姿が思い起こされたのではないでしょうか。二人はこの地上で、生き働いておられるイエス様のお姿によって目が開かれたのでした。

　では、なぜこの時イエス様の姿が見えなくなったのでしょうか。それは今を生きる私たちをも、主のご復活の証し人とならせるためです。私たちは主の聖さんに与るときイエス様のお姿を見ることは出来ません。今はまだイエス様のお姿は見えなくされています。しかし私たちは、見ないのに信じる者は幸いなりという御言葉のとおり、生きて働いておられるイエス様を信じているのです。このように、あとに続く私たちが、信仰に固く立ち続け、見ないのに信じる者とされるために、イエス様は聖餐式を制定されから、そのお姿を見えなくされ、それでも私たちがイエス様に触れることが出来るようにしてくださいました。

　今日の聖書箇所には神の御言葉としての聖書、そして体としての聖餐が、証し人の間にどのように受け継がれたかが、喜びをもって示されています。この二人の弟子たちは、イエス様の姿が見えなくなったあと、立ち上がらせられ、きびすを返してエルサレムへと向かわせられました。エルサレムには１１人の使徒たちとその仲間たちが集まっていました。この二人も、その集まりに身を投じて、道々で起こったことや、パンを裂かれたとき、イエス様だと分かった次第を皆に話したのでした。これらすべての集められた人たちは、それぞれ主のご復活の証し人として、喜びを分かち合いながら時を過ごしていくのです。

お祈りいたします。

天にいます私たちの父なる神様、今日は私たち兄弟姉妹を御前に集められ、共にご復活の主を礼拝賛美出来ます幸いに感謝いたします。私たちはあなたのお姿が今は見えなくされていることを知りました。また、そのあなたが、絶えず私たちを見つめ、見よと言って、私たちを証し人として導いていて下さることを知っています。わたしたちは代々の証し人と共に、復活し、生き働いておられる主イエスを賛美出来ます幸いに感謝します。

　どうか、私たちがあなたと顔と顔とを合わせて見ることになる、その時まで、私たちが幼な子のようにあなたの愛に守られながら、待ち臨むことが出来ますように。

　今、この場所とは違ったそれぞれの場所で、礼拝をお奉げしている兄弟姉妹がいます。どうか彼らの上にも等しくあなたの御恵みが豊かにありますように。

父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられる主イエス・キリストによってお願いいたします。